

# 神奈川県立図書館所蔵『唱歌集コレクション』

ーコレクション化の経緯と内容紹介ー

田村 行輝

## はじめに

『唱歌集コレクション』は2006年度にコレクション化された、神奈川県立図書館（以下「当館」という）では比較的最近のコレクションである。と言っても所蔵自体は以前から当館にあり、たまたまコレクション化されていなかっただけにすぎない。本稿ではその「唱歌集」がどのような経緯でコレクション化されたかを説明するとともに、その内容を紹介してみたい。また「唱歌集」全体の傾向や内容の分析、その貴重さや価値を論じていきたい。ただ筆者は音楽の専門家ではないので、音楽学的な分析や考察は一切していないことを御断りしておく。従って一司書の観点から『唱歌集』の資料的貴重さ、価値を論じていることをご理解いただきたい。

## 1 コレクションの誕生

当館に明治・大正期を中心とした古い唱歌集が存在することは古くから知られていた。筆者が1978年に県立図書館に配属された時も先輩から、「唱歌に関する質問を受けたらこの書架を見なさい」と教えてもらったことを昨日のことにように覚えている。そして実際にレファレンス担当になった時は、これらの唱歌集が大いに役立ったのはいうまでもない。かように貴重でかつ価値のある唱歌集であるが、前述したようにコレクション化されていた訳ではなく、通常の一般図書として貸し出しも行って来た。従って貸出による傷みや紛失するものも出てきて、貴重な資料が失われてしまう恐れも出てきた。これらの唱歌集には他の公共図書館では所蔵していない資料もあり、一度失われれば二度と手に入らない可能性が高い。

そこで唱歌集の散逸を防ぎ、貴重な資料を後世に伝えるためにコレクション化を筆者が提案し、誕生したのが『唱歌集コレクション』である。ただ提案するに当たって、その全貌を調査する必要があった。コレクション

化するためには、質的にも量的にもそれに相応しいものでなければならないからである。しかし調査は簡単ではなかった。当館のデータベースを検索しても、書名や件名に『唱歌』と入っていればいいのだが、入ってない場合は拾い上げられなかったからである。また分類（新訂6A版）も375.97の“音楽教科書”、767.5“国歌・民謡・祝祭歌”、767.6“唱歌・軍歌・校歌・学生歌・団体歌・労働歌”などを中心に各所に分散しており、データをまとめて抽出する方法も適わなかった。結局、直接、書架に行き一冊一冊確認する地道な作業が一番確実だと判断するしかなかった。とはいえこの作業は提案のための基本データ作成作業なので、他人に頼む訳にはいかず、また勤務時間中に行うこともできず、筆者一人で勤務時間外に黙々と行った。

この基本データ作成にあたって一番苦労したのが唱歌集の範囲である。刊行年は現代まで含めるとコレクションの貴重さが低くなるので、明治時代から太平洋戦争終了時までと限定した。作業当初は純粋に唱歌だけをピックアップして、軍歌などの軍国的なもの、武将や軍人を讃えた偉人的なものは除外していたが、唱歌を調査して行くうちに、これらも教育的な目的で作成された唱歌の一分野であることが判明し、コレクションに採用することにした。このように範囲を拡大することにともない、やはりそれまで採用しなかった童謡や民謡、学生歌、校歌といったジャンルも、その刊行された時代の貴重さを考慮してコレクションに採用することにした。この結果、373冊をコレクションとしてリストアップすることが出来た（その後、古い楽譜などを追加して、2012年8月現在394冊）。

また作業と並行して、この古い唱歌集の存在を広報する目的で、2005年12月9日～18年3月31日まで本館1Fミニ展示コーナーで“幻の唱歌集”展を開催した。この展示は利用者にも好評であったし、何よりも図書館内における唱歌集コレクションの再認識に大いに効果があった。この展示期間中に唱歌集のコレクション化を提案し、館内の検討を経た後、了承され、実現化するに至った。なお、唱歌集コレクションの請求記号は“SH…”を付けて区別している。

## 2 コレクション受入の謎

ところでこの唱歌集はどのような経緯で当館の蔵書となったのだろうか。資料に押印してある蔵書印の受入日付から判断すると、コレクションの大半が1961年6月22日、同年10月12日、1967年12月16日の3回に渡って受け入れている。特に1961年が圧倒的に多く、この2回がコレクションのほとんどを占めている。そこで受入図書原簿で確認すると、“木内書店”から購入とある。この“木内書店”は当然、古書店と思われるので『全国古本屋地図 2000年版』（日本古書通信社 1999）やインターネットで検索してみる。すると東京都府中市に木内書店という古書店が見つかる。果たしてここだろうか。そこで唱歌集を購入したときに近い文献で調べると、1967年に出版された『古書店地図帖』に2軒の“木内書店”が掲載されている<sup>1)</sup>。1軒めの“木内書店”は東京都文京区本郷に店を構えた古書店で、取り扱う古書は「和本、明治出版物、一般学術書」と記されている。明治時代の出版物を扱う古書店ならば、明治から昭和初期の唱歌集を取り扱っても不思議はない。恐らく当館もここから購入したと推測して間違いはないだろう。2軒めは現在も営業している府中市の木内書店だが、取り扱う古書は「文学」と記載されている。こちらの可能性はやや低いと言える。

当館は1954年の開館なので、1955年代は郷土資料以外にも史料集や全集、著作集、学術専門書を古書店から購入することは珍しくなかった。古書の取引先も学術専門書が豊富だった本郷の古書店が少なからずあったようである。しかし、それにしても専門書でもない唱歌集をこれだけ大量に古書店から購入する理由は謎である。図書館側から古書店に働きかけがあったとは考えにくく、古書店から図書館に働きかけがあったとみるのが妥当であろう。なにしろ50年前の事なので、今となっては知る手段もない。

また木内書店が何故、唱歌集を大量に保有していたのかも謎である。音楽関係者かあるいは篤志家が収集していたコレクションが古書店に流れたものと思われるが、それを誰が所有していたコレクションか全く分からない。コレクションがかなり系統だって収集されていることから推測して、音楽教育史に相当造詣が深い人物だった可能性が高い。購入当時であれば、

木内書店に問い合わせることもできたはずであるが、閉店となった今では訊くこともできず残念でならない。結局、偶然に偶然が重なって当館の所蔵になったというところか。それにしても、購入した後、特にコレクション化する訳でもなく、分類も配架もバラバラだった事実を考えると、唱歌集の貴重さと価値に気付いていなかったのが実状かもしれない。

### 3 コレクションの概要

次に、コレクションの概要について述べてみたい。コレクションの総冊数は394冊。出版年は、1885（明治18）年から1942年までの57年間に及ぶ。

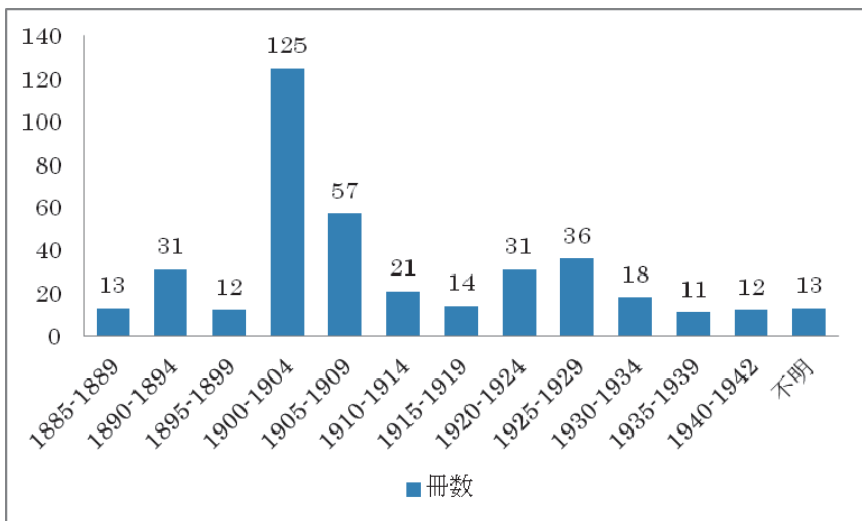


図1 出版年別グラフ

図1は出版年を5年間で区切ってグラフにしたものである。一見して1900～1904年の出版が群を抜いて多いことがわかる。ちなみに単年度の出版点数が最も多い年が、1901（明治34）の39冊、次に多いのが1900（明治33）年の24冊、3番目が1904（明治37）年の22冊になる。そして4

番目が1902（明治35）年と1903（明治36）年のそれぞれ20冊である。つまり単年度の出版点数の1位から5位までがすべて1900～1904年に含まれることになる。この刊行年が多い年がかたまっているのは、この前後に民間による唱歌集発行ブームがあったからである。その詳細については後ほど論じ、考察したい。なお刊行年不明のものも9冊あり、今後の調査が必要である。

コレクションのたまかな内訳であるが、その内容から判断して6つに分けてみた。

**表1 コレクションの内訳**

項目	唱歌集	指導書	校歌等	童謡	軍歌	その他	計
冊数（冊）	283	30	12	10	3	56	394

当然、「唱歌集」が多く、283冊に及ぶ。この「唱歌集」には単冊の唱歌も含まれる。「唱歌集」以外のものとしては、「指導書」「校歌等」「童謡」「軍歌」「その他」などであるが、合計すると101冊に上る。「指導書」は音楽指導書、唱歌指導書、音楽理論書を含む。「校歌等」は校歌だけでなく、青年団等の団体歌や愛唱歌を含む。「童謡」は鈴木三重吉らが提唱した童話・童謡運動の影響を受けたもののみを分類した。「軍歌」はもっと点数が多いのだが、ここでは当初から軍歌として作成されたものを分類した。従って学校等の教育現場で歌われた可能性がある軍歌及び軍国的唱歌は「唱歌集」に分類した。「その他」は民謡や歌謡曲の楽譜、行進曲、楽器の譜面、各国国歌集などである。

それから当コレクションの貴重さを判断するために、他の図書館の所蔵状況を調査してみた。調査は「国立国会図書館サーチ」「NACSIS Webcat」のオンライン検索及び『唱歌教材目録 明治編』（国立音楽大学音楽研究所編 1980）によりおこなった。その結果が表2である。

表2によると「どこにも所蔵なし」が124冊に上り、全体の31%が当コレクションのみの貴重な資料であることが判明した。特に公共図書館だけ

でなく、音楽系の専門大学も所蔵していないので、その貴重さが窺える。また他館で所蔵していても、1館～数館程度で、そのことから当コレクションの希少さがわかる。ただ民謡や歌謡曲の楽譜が十数点追加されているので、その分は割り引いて考えざるを得ないが、それでも全体の貴重さには変わりはない。それから「唱歌教材目録」は明治編しか刊行されていないので、唱歌関連資料のデータをOPAC公開していない大学や音楽関係資料室、教科書関係資料室について、大正時代と昭和初期の所蔵調査ができなかったのが残念である。

**表2 他図書館等所蔵状況**

所蔵館	冊数(冊)
どこにも所蔵なし	124
国立国会図書館	116
他公共図書館(国会なし)	76
大学図書館(国会・公共図書館なし)	69
その他の施設(国会・公共・大学なし)	9
計	394

なお、複数の館種に所蔵があっても、統計上の煩雑さと重複をさけるため、まず「国立国会図書館」にあればカウントし、次に「他公共図書館」、その次に「大学図書館」とカウントしていった。従って「国立国会図書館」には国立国会図書館にしかないものと、「他公共図書館」や「大学図書館」等で所蔵しているものを含むことになる。以下、他の項目も同様である。

当館しか所蔵していない資料はいずれも貴重なものであるが、それらの中で珍しいものを何点かあげてみたい。『世界航海唱歌』〈黒部峯三作曲／中内義一作詞 東京音楽会 1900 SH767.6-41〉、『地理歴史埼玉新唱歌』〈山田源一郎作曲／久保天随作詞 長島書店 1901 SH767.6-69〉、『海国記念ペルリ渡来の歌』〈山田武城作曲／錦城居士作詞 文鳳堂 1901 SH767.6-49〉、

『筑後唱歌』〈奥好義作曲／三行会作歌 秀英舎 1902 SH767.6-90〉、『北安曇唱歌』〈早川喜左衛門作曲／浅井冽作詞 巖松堂書店 1903 SH767.6-159〉、『帝國軍歌附教育唱歌』〈中川良平著 濱本明昇堂 1893 SH767.6-20〉、『大鳥公使朝鮮軍歌』〈松成保太郎著 松成保太郎 1894 SH767.6-54〉、『討露の歌』〈渡辺森蔵作曲／東京高等商業学校一橋会作詞 香盛書院 1904 SH767.6-10〉などであるが、傾向として地域限定の唱歌集や軍歌・軍国的唱歌が多いようである。地域限定の唱歌集は発行部数が少ないため現在まで残る可能性が低かったのと、軍歌は非常に多数の刊行があったという出版事情を反映していると思われる。これについては後ほど詳述する。

#### 4 コレクションにみる唱歌の歴史

日本で本格的な唱歌が出版されたのは、1881（明治14）年に文部省音楽取調掛から刊行された『小学唱歌 初編』である<sup>2)3)4)</sup>。当コレクションでは残念ながら1889（明治22）年に出版された『小学唱歌 初編4版』〈文部省音楽取調掛 1889 SH375.97-28〉しかない。この『小学唱歌』は初編の後、第二編、第三篇と刊行され、合計91曲がその三部に収録されている。この内、日本人の作曲が44曲、外国曲が47曲で、その中には「蝶々」「蛍（蛍の光）」「仰ふげば尊し」などのように現代まで歌い継がれている名曲も含まれている。



図2 『小学唱歌 第二編』

この『小学唱歌』の刊行により日本の音楽教育は開始され「唱歌科」という名称で太平洋戦争終戦まで続くことになる。なお『小学唱歌』は国定



ではなかったので、これを使用する強制力はなかった。これが後に様々な唱歌集が刊行された一因にもなっている。

1887（明治20）年に文部省音楽取調掛が編纂し東京音楽学校（現・東京芸術大学）が刊行したのが『幼稚園唱歌集』（文部省1887 SH375.97-27）である<sup>5)</sup>。全29曲を所収し、「蝶々」「数えうた」などの唱歌は現在まで残る。ただ『小学唱歌集』と同一の曲が採用されるなど試行錯誤がみられる。

その後、1889（明治22）年になると、東京音楽学校が文部省音楽取調掛から事業を引き継ぎ、『中等唱歌集』（東京音楽学校 大日本図書 1889 SH375.97-21）を刊行<sup>6)</sup>。対象は師範学校・中学校・高等女学校用に編集したもの。全18曲中、「埴生の宿」などの12曲が外国曲。また「君が代」が初めて唱歌に所収されたのも特筆すべき点である。



図3 『幼稚園唱歌集』



図4 『中等唱歌集』

『小学唱歌』が刊行されて10年が過ぎると、全面的な見直しが検討され、その結果、1892～1893（明治25～26）年に刊行されたのが第2期『小学唱歌』（伊沢修二編 大日本図書 1892～1893 SH375.97-33-1～5）である<sup>7)</sup>。この改訂された第2期の唱歌は、全6巻10冊で構成されている。

- 第一・二巻 尋常小学用
- 第三・四巻 高等小学女生徒用
- 第五・六巻 高等小学男生徒用



音程練習・発音練習・拍子練習などを取り入れ、現在の教科書編集の原形となる唱歌集であり、その意義は大きい。なお編者の伊沢修二は文部省音楽取調掛の責任者で、日本における唱歌誕生に当初から関わり、その発展に大きく寄与した音楽教育史の重要な人物である。

今まで述べてきた唱歌集は全て国が編纂した官製であるが、これに刺激を受けて全国各地で地方自治体や民間による様々な唱歌が創作され、刊行された。これらの唱歌の内、文部省の許可を受けたものは「文部省検定」唱歌として学校でも使用していいことになっていたようであるが、実際にどれほど使用されたのかは、記録に残っていないので不明である。

この民間製作の唱歌は、1894（明治27）年から急に盛んになり、特に1900（明治34）年～1906（明治39）年は一大ブームを引き起こすことになる。もっともたった394冊という当コレクションの冊数で当時の出版状況を断ずることは多少無理があるかもしれないが、ある程度の傾向は表しているのではなかろうか。

このブームの原因はいくつか考えられるが、中でも最大の原因となった歴史的な大事件は刊行された唱歌を見れば一目瞭然である。それは軍歌（軍国的唱歌）の氾濫である。軍歌は日清戦争以前も何点か出版されては来たが、1894（明治27）年に日清戦争が開戦すると多くの軍歌が創作された。1904（明治37）年に日露戦争が開戦すると対ロシア戦の軍歌一色になる。なにしろ文部省が1904（明治37）年に『戦争唱歌 第1, 2編』〈文部省日本書籍 1904 SH767.6-73〉を作成するくらいであるから、その時代の雰囲気分かる。その後太平洋戦争終了まで軍歌は連綿と続く。

また軍歌に近いものとして偉人唱歌も多数創作された。軍人や戦国武将を英雄化した唱歌で時代の影響が強い。その他、修身の教えを唱歌にした修身唱歌や歴史的な事件を題材にした歴史唱歌など多種多様な唱歌もこの時期に数多く創られている。

もう一つブームのきっかけになったのが鉄道唱歌の流行である。1900（明治33）年に「汽笛一声新橋の～」でおなじみの『地理教育鉄道唱歌・第1集東海道』〈大和田建樹作詞／多梅稚作曲 東京開成館 1900 SH767.6-1-1〉

が刊行されると空前の大流行。全国各地で鉄道唱歌や地元の名所・旧跡を題材にした地理唱歌の創作ブームが起きる。このため全国でかなりの数の唱歌が創作されたが、地方での限定出版のためその実態は不明である。

その後、1902（明治 35）年の教科書疑獄事件をきっかけに国定教科書制度が導入され<sup>(8)</sup>、文部省では 1910（明治 43）年に『尋常小学読本唱歌』を刊行、翌 1911～1914（明治 44～大正 3）年の 3 年間にわたって文部省から刊行されたのが『尋常小学唱歌』<sup>(9)</sup>。全 6 冊で学年ごとに 1 冊（1907（明治 40）年に小学校令の改正、修学年数 4 年から 6 年に延長）、現代でも歌われている曲が多数含まれている。残念ながら、両方ともコレクションにはない。

中学校用においても、1901（明治 34）年に『中学唱歌』〈東京音楽学校編 東京音楽学校 1901 SH375.97-30〉が刊行される。以前の『中等唱歌』に比べて日本人の作品が多い。38 曲中 21 曲が邦人作。滝廉太郎、「箱根八里」「荒城の月」を所収。1909（明治 42）年には『中等唱歌』《第 2 期》〈東京音楽学校編 共益商社書店 1912<sup>(10)</sup> SH375.97-31〉が刊行されるが、再び外国曲が増える。30 曲中 20 曲が外国曲で、ドイツ民謡が多い。

こうした唱歌の国定化に向けた動きにともない、民間発行の唱歌集は下火になっていくが、中には良質な唱歌集もあり、広く使われた。1896～1906（明治 29～39）年に教育音楽講習会が編纂して刊行された『新編・教育唱歌集 第 2 集』〈教育音楽講習会 三木書店 SH767.7-88〉。採用曲数 247 曲、皇国思想や徳目に偏しない立場で選曲、全国に広く普及。

大正時代になると、鈴木三重吉、北原白秋、芥川龍之介、西條八十らによる、童話・童謡運動が興り、童詩に曲をつけた童謡が盛んに創作された。「かなりや」「赤い鳥小鳥」「赤い靴」など、童謡で文部省検定になったのは十数曲。童心主義は、その後の唱歌にも多大な影響を与えた<sup>(11)</sup>。

1932 年に『尋常小学唱歌 新訂版』〈文部省 大日本図書 1932 SH767.7-75〉が文部省から刊行。季節等の教材配列や伴奏付きの楽譜など現在の音楽教材の方法を採用。基本的には『尋常小学唱歌』を引き継ぐ。

1941 年に唱歌科が芸能科音楽に変更。同年、国民学校初等用の音楽教科

書が文部省から刊行。初めての国定教科書。「ウタノホン・上」(第1学年用)「うたのほん・下」(第2学年用)「初等科音楽」(第3学年～6学年用)。皇国史観、戦時色を色濃く反映している。

## 5 いろいろな唱歌集（儀式唱歌から唱歌劇まで）

当コレクションの中に『唱歌萃錦（すいきん）』〈SH767.6-120〉という編者・出版社・出版年不明の唱歌集がある。内容から判断して指導者用の教材と思われるが、完本の形で残っているのは東京大学文学部図書館と当館のみである。なお『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』の中に「唱歌萃錦」の説明がでてくるが<sup>12)</sup>、内容が異なるので別本と思われる。当コレクション中の『唱歌萃錦』の出版年を推測すると、所収されている軍歌に日露戦争中の1904(明治37)年8月の黄海海戦を題材にした「八月十日の海戦」が含まれているが、1905(明治38)年5月の日本海海戦を題材にした軍歌は含まれていないので、1904年の末から翌1905年の前半にかけて出版された可能性が高い。この『唱歌萃錦』は唱歌を10編に分類しており、当時の唱歌に対する考え方を知ることができて興味深い。10編とは次の通りである。

「第一編 儀式唱歌（附各国々歌）」「第二編 修身唱歌」「第三編 地理歴史唱歌」「第四編 四季唱歌」「第五編 軍歌」「第六編 遊戯唱歌」「第七編 雑曲」「第八編 進行曲」「第九編 箏曲（附詩吟譜）」「第十編 叙事唱歌（附音程練習題）」

これらの内、第八編と第九編は唱歌ではなく、第十編も音程練習用の唱歌なので除外すると、残りの7編が唱歌の分類となる。この明治時代の分類を踏まえて当コレクションを分類してみたのが次の表である。

表3 分野別唱歌集

項目	総合	儀式	修身	地理歴史	四季	軍歌	その他	計
冊数(冊)	132	10	18	63	3	46	19	291

なお表のなかの「総合」とは、『尋常小学唱歌』や『中等唱歌』のように様々な分野の唱歌を含むものをここに入れた。本来なら1曲ごとに分類すべきところだが、多数の曲をデータベース化するには時間が足りず、今回は見送ることにした。従って残りが単分野の唱歌集として発行されものとなる。また「その他」には童謡や唱歌劇等をここに入れた。それと『唱歌萃錦』にある「遊戯唱歌」については、曲だけでは判断できず、分類は見送った。

次に各分野の特色と代表的な唱歌について取り上げ、紹介してみたい。

## 5.1 儀式唱歌

『唱歌萃錦』の第一編で取り上げられているのが儀式唱歌。学校生活の中でそれだけ重要視されている証拠であり、最初に覚えなければならない行事を唱歌にしたとも言える。儀式唱歌は大きく分けて入学式や卒業式、始業式や終業式、学校記念日といった学校生活を題材にしたものと、紀元節や天長節、正月や祝祭日等の国家行事を題材にしたものの2つがある。いずれにせよ、児童・生徒に学校行事や国家行事を教える目的で創作された。

学校生活に必要なことを覚えるための『生徒必読教訓歌』〈三尾重定著 吉澤富太郎 1886 SH767.7-29〉、学校行事をテーマにした『遠足唱歌』〈小出雷吉編 大學館 1903 SH767.6-50〉、国家儀式を題材にした『天長節の歌』〈伊沢修二作曲／高崎正風作詞 1888 SH767.5-5〉、国民の祝日を扱った『祝祭日唱歌集』〈共益商社編 共益商社 1893 SH767.5-7〉、などがある。また儀式そのものを唱歌にした『儀式唱歌』〈奥好義編 内田正蔵 1893 SH767.7-20〉まで刊行されていた。ただ国家儀式を扱った唱歌は、次の修身唱歌と境界があいまいな点は拭えない。

## 5.2 修身唱歌

唱歌の中でも特に時代を反映しているのが修身唱歌と軍歌である。修身唱歌は初期の頃から唱歌の中心的存在として位置付けられていた。これは

音楽（唱歌）教育とは言え、修身（道徳）教育の例外では有り得なかったからである。

修身唱歌の内容も多岐に渡り、1894（明治27）年の『小学修身唱歌 下の巻』（菟道春千代編 榊原文盛堂 1894 SH375.97-35）や1902（明治35）年の『修身唱歌』（金港堂書籍編 金港堂書籍 1902 SH767.7-70）などのように修身そのものを唱歌にしたものから、1900（明治33）年の『教育勅語唱歌』（山田源一郎作曲 栗島山之助作詞 秀英舎 1900 SH767.6-106）、1901（明治34）年の『公德唱歌 2版』（町田久著 魚住書店 1901 SH767.7-44）、1908（明治41）年の『修身唱歌二宮金次郎』（永井孝次作曲／大和田建樹作詞 三木楽器店 1908 SH767.7-84）まで多くの唱歌が創られた。

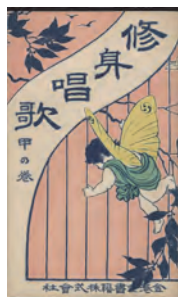


図5 『修身唱歌』



図6 『教育勅語唱歌』



図7 『修身唱歌二宮金次郎』

また1902（明治35）年の『女徳唱歌』（山田源一郎作曲／中島角次郎作詞 榊原文盛堂 1902 SH767.7-53）や1901（明治34）年の『姫鑑』（山田源一郎作曲／友田宜剛作詞 日本遊戯調査会 1901 SH767.7-49）など女子のための道徳唱歌も創作された。

### 5.3 地理歴史唱歌

いわゆる社会科分野を扱った唱歌は非常に多くのものが創られた。さらに一地方限定の唱歌が多いのもこの分野の特色である。ただこうした地域限定の唱歌はすでに失われてしまったものもあると思われるので、その全

貌は不明である。当コレクションの地方唱歌集には該当地方の県立図書館に無いものもあり、その貴重さが窺える。

この分野でまず取り上げなければならないのは鉄道唱歌であろう。前述したように『地理教育鉄道唱歌・第1集東海道』の刊行は国民の間に空前の大流行になり、第1集に引き続き「第2集・山陽、九州」「第3集・東北地方」「第4集・北陸地方」「第5集・畿内隣邦」と全国を5地域に分けて鉄道唱歌は刊行された。この鉄道唱歌の流行は長い間続き、1910（明治43）年『汽車・九州線唱歌 訂正版』〈田村虎蔵作曲／大和田建樹作詞 市田元藏 1910 SH767.6-91〉、1911（明治44）年『中央線鉄道唱歌』〈福井直秋作曲／福山寿久作詞 好文堂 1911 SH767.6-128〉などの鉄道唱歌が全国各地で創られることになる。



図8 『地理教育鉄道唱歌』



図9 『地理唱歌・汽車の旅』



こうした鉄道唱歌は教育的見地から創作された地理唱歌の一部であるが、地理唱歌は歴史唱歌とともに唱歌の一大分野を形成している。1902（明治35）年の『日本地理唱歌』〈田村虎蔵作曲／新保磐次作詞 金港堂書籍 1902 SH767.6-17〉等の国内だけではなく、同じ1902年の『外国地理唱歌』〈田村虎蔵作曲／新保磐次作詞 金港堂書籍 1902 SH767.7-17〉といった外国地理のものも多数創られた。

このような地理唱歌の隆盛にともない、各地で郷土を対象にした唱歌創作の機運が盛り上がりを見せる。そうして創られたものが、ご当地唱歌と

も言うべき郷土唱歌、地域唱歌である。1901（明治34）年『信濃唱歌 第1編』（村松今朝太郎編 上原書店 1901 SH767.7-23）、1902（明治35）年『筑後唱歌』（奥好義作曲／三行会作歌 秀英舎 1902 SH767.6-90）、1900（明治33）年『因伯地理唱歌』（田中瑞徳作歌 旭日堂 1900 SH767.6-43）、1901（明治34）年『地理歴史埼玉新唱歌』（山田源一郎作曲／久保天随作詞 長島書店 1901 SH767.6-69）、1902（明治35）年『糸島地理唱歌』（島村吉門著 重富典一 1902 SH767.7-80）など広い地域から狭い郷土まで、主題も地理や歴史といった観点から様々な唱歌が創られた。

神奈川県においても1930（昭和5）年『神奈川県懸小學唱歌 尋常5年用』（神奈川県唱歌研究会編 京文堂 1930 K76-2）、1901（明治34）年『地理教育 神奈川県唱歌』（山田源一郎作曲／三山春次作詞 1901 K76-4）が創られているが、残念ながら『唱歌集コレクション』には含まれてはいない。地域資料として受け入れたものは、唱歌コレクションに加えていない。かながわ資料室で閲覧は可能である。なお上記の2冊を含めて地域資料では8冊の唱歌集を所蔵している。



図10 『外國地理唱歌』

図11 『筑後唱歌』

図12 『地理教育 神奈川県唱歌』

単独の唱歌集として刊行されてはいないが、神奈川県内を扱った唱歌で特に有名なのが、1901（明治34）年の『中学唱歌』の中に収められた「箱根八里」である。「箱根の山は天下の険…」の歌い出しで始まる曲は語調の



歯切れ良さと、滝廉太郎の作曲により、箱根地方を全国に広めた。

珍しい唱歌としては、産業奨励唱歌がある。これは地理唱歌の一部として創作されたもので数も少ない。明治政府は富国強兵政策の一環として産業奨励を強く押し進めたが、そうした時代を反映して創られたのが産業奨励唱歌である。

当時の産業といっても重工業はまだ緒についたばかりで、輸出品の主力は生糸・絹織物であった。従って養蚕業を奨励するために創られたのが、

養蠶（蚕）唱歌である。1901（明治 34）年『養蠶唱歌』〈滝上豹三郎著／矢島昭策作曲 日新舎 1901 SH767.7-34〉、1902（明治 35）年『実業教育養蠶唱歌』〈前田久八作曲／練木喜三 広文堂書店 1902 SH767.7-36〉などが創作された。こうして生産された生糸が全国から集められ横浜港から出荷された。

変わったところでは 1902（明治 35）年の『内國勸業博覧會唱歌 第五回』〈浪華音楽会編 浪華音楽会 1902 SH767.6-37〉がある。現代で言えば万国博覧会のテーマソングといったところか。

その他のユニークな唱歌としては、1911（明治 44）年の『飛行機唱歌』〈岡野貞一作曲／日野大尉作歌 共益商社書店 1911 SH767.6-117〉がある。1910（明治 43）年 12 月 19 日に徳川大尉及び日野大尉による日本初飛行が行われて、翌年にはこのような唱歌が作成されたことを思うと、その関心の深さが窺える。



図 13 『養蠶唱歌』



図 14 『飛行機唱歌』

歴史唱歌には1900（明治33）年の『日本歴史唱歌 第1集』（初霜女史作曲／服部登作曲／町田久作詞 東雲堂 1900 SH767.6-85）のような歴史全体を扱ったものもあるが、1901（明治34）年の『海国記念ペルリ渡来の歌』、『歴史唱歌宇治川』（こまのや主人作曲／勝家貞文作詞 文友館 1901 SH767.7-42）、『天目山曲』（行方正彦作曲／奥山新治郎作歌 温故堂書店 1901 SH767.7-40）といった歴史上の一舞台や一事件を題材にしたものまで多岐に渡っている。いずれも歴史教育を目的として創作されたものである。

歴史唱歌においては歴史的人物や偉人も多く題材に取り上げられた。1910（明治43）年の『二宮尊徳、菅原道真、偉人唱歌』（大西正直作曲／下平末蔵作詞 清水井文房具店 1910 SH767.7-67）、1892（明治25）年の『道真公 新撰軍歌集第5編』（菟道春千代著 金巷堂 1892 SH767.6-62-5）、1901（明治34）年の『菅公唱歌』（下田歌子著／奥好義作曲 益世堂 SH767.3-6）などの偉人や1901（明治34）年の『武田信玄』（行方正彦作曲／田草川喜作 温故堂書店 1901 SH767.7-37）、1902（明治35）年の『高山正之の歌』（内田栄太郎作曲／石山録之助作詞 煥乎堂 1902 SH767.6-79）といった戦国武将や勤皇の志士も題材に選ばれている。

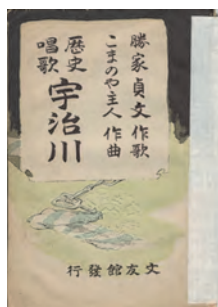


図15 『歴史唱歌宇治川』



図16 『菅公唱歌』



図17 『武田信玄』

#### 5.4 四季唱歌

当コレクションの中には、四季唱歌と思われるものは3点と極めて少ないが、これは恐らく単独の歌集として発行点数が少なかったためと推測さ

れる。と言って四季唱歌が少ない訳ではない。『唱歌萃錦』においても四季唱歌は124曲が所収されている。また『小学唱歌』や『中学唱歌』等の総合唱歌集には必ず四季唱歌は多数収曲されており、唱歌集の主要部分を占めている。単独の唱歌集が少ないのは、軍歌や鉄道唱歌のように話題性に乏しく、民間での出版が少なかったためと思われる。しかし、自然をテーマにした唱歌のため、政治性や時代性にとらわれることがなく、戦後になっても歌い続けられたのが四季唱歌である。

ちなみに当コレクションには、1901（明治34）年の『春夏秋冬花鳥唱歌』『春夏秋冬散歩唱歌』（大和田建樹作詞 開成館 1901 SH767.7-39）、『野外散歩唱歌』（多梅稚作曲／大和田建樹作詞 西野虎吉 1905 SH767.7-24）がある。

## 5.5 軍歌（軍国唱歌）

『唱歌萃錦』の中でも軍歌は唱歌の一分野として認識され、歌われていた。1894（明治27）年の日清戦争から1904（明治37）年（1904）の日露戦争にかけて非常に多くの軍国的唱歌が創られた。



図18 『戦争唱歌』

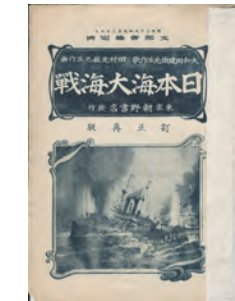


図19 『日本大海戦』

軍歌は明治政府の富国強兵策に基づく国威発揚を目的としたもので、初期の頃は『正成卿 湊川の段 新撰軍歌集第4編』（菟道春千代著 金港堂

1891 SH767. 6-62-4) や前述の『道真公 新撰軍歌集第5編』のように武将や偉人を軍歌として題材に選んでいた。しかし日清戦争が開始されると、戦争そのものを題材にした軍歌が創作されるようになり、1894 (明治27) 年の『征清愛國軍歌 増補再版』(菟道春千代著 飯田由次郎他 1894 SH767. 6-86) や1905 (明治38) 年の『日本海大海戦 訂正再版』(田村虎蔵作曲/大和田建樹作詞 朝野書店 1905 SH767. 6-11)、軍人をほめたたえるものとして1904 (明治37) 年の『征露軍歌廣瀬中佐』(納所弁次郎作曲/大和田建樹作詞 1904 自省堂 SH767. 6-28) や1905 (明治38) 年『東郷大将』(田村虎蔵作曲/大和田建樹作詞 朝野書店 1905 SH767. 6-18)、忠節忠君を礼賛するものとして大正元年の『嗚呼乃木大将 武士道唱歌』(瀬戸口藤吉作曲/阪正臣詩 松本楽器 1912 SH767. 6-97) など多種多様なものがある。中にはそのものずばりと軍国唱歌と題した1904 (明治37) 年『敵は幾萬 軍国唱歌 訂正版』(開成館音楽課編 開成館 1904 SH767. 6-12)、1905 (明治38) 年『軍国唱歌日本海大海戦』(目賀田万世吉作曲/加藤義清作詞 開成館 1905 SH767. 6-67) など創作された。

前述したように文部省が1904 (明治37) 年に刊行した『戦争唱歌』は軍国的唱歌の代表作であるが、全国各地至る所で多数の軍国的唱歌が創作され、教育現場ばかりではなく、出征兵士の見送りや激励会などで歌われた。これらの軍国的唱歌は子供用の唱歌としてばかりでなく大人の軍歌として歌謡曲の一大分野を形成して行くことになる。日露戦争の戦勝に沸いた時をピークに軍国的唱歌はやや下火になるが、太平洋戦争が終了するまで連続と続く。

## 5.6 唱歌(舞踊)劇

唱歌に遊戯を加えたものが唱歌遊戯で、その中に舞踊や演劇的要素を加えて発展させたものが唱歌(舞踊)劇である。唱歌遊戯は明治の頃から行なわれていたが、大正期に入ると飛躍的に普及する。宝塚歌劇団は1913 (大正2) 年に結成された宝塚唱歌隊がその始まりになるが、当初は唱歌を歌う合唱団であった。翌1914 (大正3) 年に宝塚少女歌劇団と改称し、桃太

郎を題材にした『ドンブラコ（桃太郎） 御伽歌劇』を初演している<sup>13)</sup>。この1911（明治44）年に創られた『ドンブラコ（桃太郎） 御伽歌劇 4版』（北村成於著 弘楽社 1920 SH766.2-8）以外にも、『クリスマス お伽歌劇』（佐々木紅華著 七聲舎出版部 1919 SH766.2-7）、『桃太郎 童話唱歌 第2編』（田村虎蔵作曲／藤園作詞 吉川半七 1901 SH767.7-22-2）などがある。なお唱歌劇は1937（大正10）年『對話唱歌』（町田桜園著 盛林堂 1937 SH767.7-71）という名称でも普及していた。

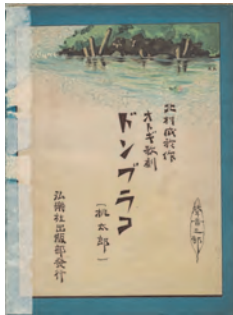


図20 『ドンブラコ』

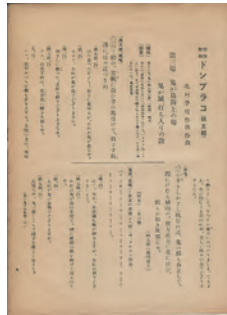


図21 『桃太郎』

## おわりに

以上のように「唱歌集コレクション」について簡単な紹介と分析を試みて来た訳だが、紀要という制約の中ではコレクションのほんの一部しか紹介できなかつたのが残念である。ただコレクションの貴重さをいくらかでも汲み取っていただければ幸いである。

今後の課題としては、唱歌集の所収されている曲のデータベース化である。唱歌についての問い合わせやレファレンスは、曲名で来ることが多く、データベース化しておけば迅速に対応できるはずである。

もう一つの課題はコレクションの保存である。出版されてからかなりの年数が経っているのと、コレクション化の前は貸出も行って来たので、非常に傷みの激しいものもある。当館だけにしかない貴重な資料を汚破損で

なくす訳にはいかない。貴重な文化財を後世に残すのは我々の務めであり、責任でもある。と言ってコレクションの利用制限するのは、公共図書館の取るべき道ではない。従って利用と保存を考えれば、コレクションのデジタル化が最善の方法ではなかろうか。一刻も早い取り組みが望まれる。

### 注・参考文献

- 1) 紀田順一郎. 古書店地図帖—東京・関東・甲信越—. 図書新聞社, 1967, p. 26.
- 2) 供田武嘉津. 日本音楽教育史. 音楽之友社, 1996, p. 289-293.
- 3) 東京芸術大学音楽取調掛研究班. 音楽教育成立への軌跡. 音楽之友社, 1976, p. 97-120.
- 4) 松村直行. 童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ—明治・大正・昭和初中期—. 和泉書院, 2011, p55-93.
- 5) 前掲 2) p. 297.
- 6) 前掲 2) p. 300-302.
- 7) 前掲 2) p. 302-305.
- 8) 前掲 2) p. 308.
- 9) 前掲 4) p. 179-189.
- 10) 当館所蔵 15 刷.
- 11) 前掲 2) p. 342-351.
- 12) 前掲 4) p. 149-150.
- 13) 宝塚歌劇団. 宝塚歌劇四十年史. 宝塚歌劇団出版部, 1954, p. 36-37.

### 参考文献

- 1) 音楽取調成績申報要略. 大日本図書会社, 1891.
- 2) 秋山龍英. 日本の洋楽百年史. 第一法規出版, 1966.
- 3) 中山エイ子. 明治唱歌の誕生. 勉誠出版, 2010.
- 4) 小川和佑. 唱歌・讚美歌・軍歌の始原. アーツアンドクラフツ, 2005.
- 5) 堀内敬三. 定本日本の軍歌. 実業之日本社, 1969.
- 6) 遠藤宏. 明治音楽史考. 有朋堂, 1948.
- 7) 山住正己. 唱歌教育成立過程の研究. 東京大学出版会, 1967.